

みて、はぢらひたまへる御さま、あかぬ所なし、

〔源氏物語四十六〕椎本こなたにかよふさうじのはしのかたに、かけがねえたる所に、あなのすこしあ

きたるを、みをきたまへりければ、とにたてたる屏風を引やりてみ給、こゝもとに木丁をそへたてたる、あな口をしと思ひて、ひきかへるおりしも、風のすだれをいたう吹あぐべかめれば、あらはにもこそあれ、その御木丁をし出てこそといふ人あなり、おこがましきもの、うれしうてみ給へば、たかきもみじかきも、木帳をふたまのすにをしよせて、このさうじにむかひて、あきたるさうじよりあなたにとをらんとなりけり、

〔源氏物語五十二〕蜻蛉れいさやうの人のゐたるけはひには、はれくしくまつらひたれば、中々木下どものたてちがへたるあはひより、みとをされてあらはなり、

〔枕草子〕御物いみなりける日、古今をかくしてもてわたらせたまひて、例ならず御きちやうをひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおほしけるに、御さうしをひろげさせたまひて、略下

〔榮花物語十六〕本かくて枇杷殿子には、四月に御わたりあり、略中このたびはひめ宮の御かた子禎まつらはせ給へり、あやにうす物かさねたる、むらさきのすそごの、御几帳ども、御帳のかた

びらも同じやうにて、むらごのひもして、こんまやうでいなどして、ゑがきたり、御丁いとさ、やかにおかしげなり、何事もいとうつくし、

〔枕草子四〕頭中將のそゝるなるそらごとをき、て、略中あさましう何のいはせける事にかとおほえしか、さてのちに、袖ぎちやうなどとのけて、おもひなをり給ふめりし、

〔安齋隨筆前編十〕一袖几帳 袖几帳と云は、几帳のつくりざまあるにはあらず、人をも見じ我がかほをも人に見られじとて、袖をかほにおほふが、几帳立たるごとくなれば、その事を袖几

帳と云也、枕草子に、頭中將齊信卿に、何人か清少納言の事をあしざまに申きかせけるにより